





柳多留古五篇序

二百四十一

年一歲之美如心之通也無所不
系以柳之老木枯果之於人既絕
時亦由是生之乃以是之也
是絕之也地極遠之也教之也

あはれ撰録のしりしり中誠言夜あはれ
橙の道へるあはれ長の夏河くし年あはれ
てう手進く家名あはれあはれあはれあはれ

市中庵を述

寛政のしりしり秋



冊七五

所具是へ校しりしりあはれあはれあはれ
夾由のあはれあはれあはれあはれあはれ
四く目乃あはれあはれあはれあはれあはれ
秋乃田へあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれのあはれあはれあはれあはれあはれ
下秋乃あはれあはれあはれあはれあはれ
六十帖もあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれ

門柳

玉童

文集

変仕

五連

龜遊

雨譚

三交

窓梅

傳正一山 竹木の花がさけ
 おくふふ十の若いのと出さか入
 ニア人い足波 芥川 凡水
 おくのあふくといふくしとま
 一日乃断ハ枕の 実とにげ
 鏡尺くもる 色ゆ乃あこのよさ 豊好
 かさとうい糸の 箱為ふ雨ふふ
 六月の朔日 雲と 峯と 出
 上の方乃あふ 女の不くと出
 一山 東李 凡水 凡水 凡水
 狐声 紀原 紀原 紀原
 龜鳥

柳廿五

大一正 乃新 きたりさ
 免許ま 持る ぬい糸しもの カテラ
 候とよ乃く ぬ太太馬が中十 三朝
 垢 竈の烟 十二 年 芳蝶
 花さう 伊兵衛 一首とんが履 哥遊
 夕月を冠し 蔵人 口おとく 如雀
 一生小の 肉をさ 出さし 三丁
 はとと春 玉小 疵 連鳥
 東帯乃信人 二月下旬 出 湖水

是ハ〜〜母乃活ッおとざ〜
 孤雲
 とき〜〜〜
 千産
 二五十〜〜
 義徳
 門の〜〜
 程声
 之支ぬの内〜
 吉川
 河ち〜
 長故
 盗人の虎〜
 香真
 又せ〜
 五鳥

平七五
 二

松の進本取う州ち山作〜
 文子
 小舟〜
 紀樂
 城〜
 浦舟
 丸山〜
 珍高
 羽帝〜
 子誠
 酒〜
 麥雨
 大坊〜
 五鼠
 大〜
 口春
 著〜
 羊先

控の梅もくく花もくくく出の
油法のほ子と油くくくひ
宝井もくくくく油虫
むく志のくくく火とくく
くくくくくくくくく
辛もくくくくくくく
標のもくくくくく
まのさくく人と山次おくく
花ひふとくくくくく
紀鳥
一馬
喜水
湖舟
儘成
高藤
石斧
境子
邑市

中世がゆらぐげびく花乃山
はろくくくくくくく
庚午の月くくくくく
くくくくくくくくく
叱らくくくくくくく
名のきくくくくく
小くくくくくくく
川道小くくくくく
くくくくくくく
桂里
秀朝
扇朝
糲志
若竹
百菊
川鳥

江戸の馬田合芝居がつかひ縁急 東鳥
 心ゆくゆくの名代万一のけ 東湖
 ささげとそいれうけし満と下女 亀水
 ささげとそいれうけし満と下女 不醉
 者下り万とまきうし葉をちぎり 周栗
 正多ぶ津とく糸を分がよけり 漏穴
 小町のよき海の中へけおきた 鳳頭
 浅英羽こまを推さるるがきし 丸篇
 おまじりふりふり山をぬりよ 姫小

一月上ちふ小判とみそくくひ 里鳥
 長橋と小判としもき詠つて家 未興
 ついぢきくちあつて川とま大代々 花丈
 おまの十九お老ハ玉ととら 今紀原
 とい軍の蜜扇乃上とふび 免舟
 西川もせらふの叶ハ水とむさ 康丸
 電足もくハ云はしと持 宣川
 扇屋の雲東江流と生 左益
 糸のゆきとくぬるととら 圓之

大木を吹く〜 燈の中〜 東里
 さ〜 ら〜 燈の光〜 波研
 砕〜 玉〜 玉如
 花〜 綺席
 和名化〜 顔六
 夜〜 澤志
 遠の子〜 舟
 蓮の葉乃上〜 鬼郷

押七五
 五

丸〜 柏之
 虎〜 守静
 軍〜 三師
 油〜 馳山
 大門の扉片〜 箕山
 名ハ〜 春魚
 赤〜 荒爾
 大〜 和泰
 春の油ハ〜 雅情

老くしけハ下女牡丹う出もろゝを散木
 ろくくやちら冠るも年と持、王章
 うけしむも、かしのやじ討多
 おつてさほほもほほよ上り
 桃の花冠へとも、うさ
 清といくら、ま夜、鹿耳、ふの香
 ちく、なの上、し、まの、と、め、と
 れの聖日、清、始、言、と、毛、由、一、つ、と、ひ
 り、し、と、も、お、の、よ、と、ぶ、う、ま、け、と

惜つるはしむる、く、丹、菊、と
 けづるけ、ほ、物、く、ま、ゆ、と
 お、ま、う、も、ま、の、う、お、が、つ、う、り、と、と、と、と
 琴名、ま、う、ハ、桃、花、ガ、清、ま、と、入、り
 清、ま、の、ま、ま、が、只、の、信、後、之
 美、ふ、ん、だ、ん、と、ま、び、ん、と、欠、後、と
 去、月、の、け、と、ひ、十、日、琴、と、ひ
 太、上、る、ま、ま、何、な、ら、由、り、と、の
 十、西、日、の、か、い、十、日、が、長、と、お

其や若のらてりしとて
玉女のゆげごととあそび
色きし能はとあそびあふさ
きくらし道尾しきしにぬら
生かしし金とまふのハ時花
き川しよつちへをさし月
年とゆらゆらしぬと
か虫魚をびすしゆか
黒しききしきし
蝶が

静大五

夜中しぬまふハくさふ
口とと庵室の戸ハ張くふき
ふりてもおしきつし
おんういとゆし仲人へ
しよふたに清くし下戸ハ
後屋の裏に
玉女こそふか
若の時の花
色あ乃

んきの大まいとく〜ぶ〜ら〜
ア〜〜〜
遠く。地人場とワ〜
張の道とま〜
化〜
大阪の全運相、も〜
辻〜
油〜
見おた是のい〜

柳七五九

五十来と中〜
んトんの〜
つふれ〜
門〜
細店〜
茶と〜
祝儀と〜
や〜
孫〜

おらんの子は此の如く
是ハ大由んと云ふ
焼陣と下如ハ
二十ハ
江口の地女
とんぢぢ
おぢぢの上へ
七月六日
目出正
お使
お使

お使

お上の札
お妻の
南
兵庫
仲人
煙
おの
おん
おん

娘のよも羊くけの緒十三日
 世のよも羊くけの緒十三日
 やしつら鹿耳く候の音ときき
 をしげ一平かまのしきまけり
 發とちけんがふいちけり
 雲ふぶ下かきな 宿 ちり
 さら併らんやまのしきまけり
 夏のよも羊くけの緒十三日
 箱根くろしハ大キかくだいし

人づよ田人く一せ大づひ
 おまぢのハ格むもよ乃ハ猫かひ
 辻よとくふくかきり 雲 兄
 奥りしころのぬれらむもよ乃代
 私を播子くけりこ代目
 のよも羊くけの緒十三日
 ちよぶ川ハ格と冬くもよ乃代
 虫のけぬ池と相の本こもよ乃代
 菱けんきりくも 蜂のきりし

三月の蟹がんとさしを中を
名物とらるべし城を
まの人の娘くひも
表さハ土子火を
大のちがまん古
あんなも鴨か入
秋葉ハ水が
た娘と志ちやの
城ハ字書 女唐
小言

一 京へも
の
はさ
いつき
近松
紫
只
素
合

蛇のふやげ如房の赤い舌と切
らとてでも回す虫尻のくし
美 幸ハ坊中とくか玉と切
らんふやげ如房の赤い舌と切
ハ十九日ふきんとくし物と出ら
まき山崎とまき山崎と出ら
天丈と切人かき如房の赤い舌と切
斗 赤半袴かきいしとくし物と出ら
とくし物と出ら

五五
十三

素人の善法木とくし物と出ら
斗 赤半袴かきいしとくし物と出ら
ハ五五丁を伴の晦日と出ら
志 けけをぬいしとくし物と出ら
いふれとくし物と出ら
くふき屋とくし物と出ら
右 梳とくし物と出ら
ふん 赤半袴かきいしとくし物と出ら
田の畔乃 時分ハけらふとくし物と出ら

犬ぶろけ茶みせぐ後とつろり
如扇の留ろく呼出の面ふさ
同と口ろく呼出の面ふさ
茶ごのしるふろのと後ぶら買
村の色おどろびと英人
買ハロヤリ持系娘な
カラ反へ白いゆりしる
るる物ヤリ件系ぶせがし
別は考ふたに曾礼く音

卯九五十一

もろぬ松毛ぶらおまが付
十ハ菱おしるハ秋の掛製し
系のおしるおまののぬん
そころひ吹ぬろしる系
大名のつじんと通る花う山
本陣かかり掛不ひふら
掛えりさきん坊さしるけ
しるの花えがゆしるぬせ
侍事ハ道人松の木乃まががけ

お二まの娘とも侍と共自より
若死の者上下と辨る
若いより作花娘小油着とす
仲玉よりゆく方とくさくさく着
や乃流川くく私系り
色より乃乾糸とくせしけ
大相る座をさくくと持と
おふひの甲と糸糸小糸の糸
糸の糸糸糸糸糸糸糸糸糸

君のままにまこと好子一娘隠す
徳のままにまこと苗字のままに
〜ん乃美礼丸ひまふり
母娘ハ子中一の月夜ままに
系糸も不沙法乃門ハ横おふり
おけりたもく〜娘の首と入北
岸一山〜ひこま〜の安え合
貴母ふら〜やま〜の安え合
石心し重えハ扇けりひさ

君命とまひつゝ奥く君し北の
河川いづれをむらう一人出ら
二階の窓よりやみふまき 邊
てろち人屋やとくぬゆあぬ
ちん金い屋中思ふ清く水
杯ぞ水く戸相くといふ大坂や
伝を歩く人ときろち人屋
く茶も碎ぬとく北の川
山すきとく北の川

運 虫魚 疑きまゝ 伊 指 屋 買
そらうごちんせと女さ
雪こくはる麻くといふ伝
吸 甘 び ぐらゐ 谷 中 ぐ ぶ ぐ
わ 北 茶 依 後 出 っ っ 河 ち ぎ
金 夜 ぐらゐ け ち ぎ 記 ぐらゐ
し ぐらゐ ぐらゐ 後 ぶ ぐらゐ ぐらゐ
書 ぐらゐ と 踏 ち ぎ 奥 ぐらゐ
敬 ぐらゐ 杯 の 出 ぐらゐ ぐらゐ ぐらゐ

きふ、蟹と入とくささ、
りつとくささものがおもしろくけいひの氏
そはのあかむ内ふけいけいけい
午早振ぶらぬ正五九月ま
所をぬと所をいへるが
地づのうまおくはぶ土用干
初、くささの友達記に入れ
点也くささく巻やハ版とくさ
ふけんぬらんぐくまきのり
田

素又あかむさうやえり買つま
かろい快指こそぞのぞくさ
夷海舟とくささく伝説くらひ
まおれもぶさうまきんハ半吉
ンハド人のうまハおれまぬ
千年もまおりかきり放生
名がれくささく名のきい牡
法服の厚及法服のく入
きんくささく古巻ハ昆布

とらう丁一馬んをと成とやう
嘆屋娘俗名お友さるうう
目のまじやふ紫衣の如く大法寺
篠やふ成さるうう翁ううやう
むきーおぶ出とらきやふの豊昌さ
不沙汰の長次もさせと名白ん
詠日記八日月お付く杜あ
さうさハ言がかとく種とさ
追まー柿の枝成ふ向やう

乱撫子さぬふの何よい障
万葉か袖ーらまけく娘はが
まぶ着いーい言ましい
縁会く今及心と母の縁
甲の中へ大屋のまらるう作き彌
碎そへ甲十五人がチー
先ふ蚊もやうるまはくさ角
初草ハ存口考とえちうう
音羽の踏とまきー計か出る

鼎かゆり典末か大念ひ
之浦より海老屋ハも海るく
若ふしやる氣をいふ権示
もふふふふのり古のり
中央おだんがくあつる
坂の祀己午のりや何と出る
帝人乃知ぬ夕暮おむと子り
ちまうくまんの木上下のり
地物の坂帝まふか上りや

燒画の初年とて下り
も此の字とく知く孔子
歌の墨坂おちる
昔とせん振袖ぐえん
色無の終乃中りハ坂屋
袴着と夷話るけちま奴
かうどやうかおらんいさぐおし
哉しん尼ニ三人あやハもいり
至年記しはる日り莫然ん

母房ハ人かを〜〜付々上き
甲の牛出〜低城のさ乃多
志す〜むいおれと入〜〜夜々が出ま
令の〜トおも育ら〜〜と定曆屋
ま〜さふお歌踏らまの〜病〜つがり
川〜ゆかえつきお無山と出る
又を志。心がい何々止〜後家〜ゆり
花くんぎ〜をぬい〜出る ざんま
中の丁忌中ハれのやい〜むり

七五三

心中ぶつら〜と花川
ぬり袋目口いぎ中〜お物 ちる
〜〜〜か海〜昨返〜花〜え〜
〜〜〜ふ〜この人〜曇ま〜おし
志す〜〜〜む〜〜川〜吹出
お餅〜〜指を〜む〜娘 飛
ま〜ぶ〜おま〜つ〜と〜ハ〜マ〜カ〜ぬ〜〜と〜し〜る〜く
果足〜の〜何〜〜〜ひ〜と〜お〜り 嘉九年
木馬〜〜〜ま〜〜〜げ〜と〜お〜ら 嘉末屋

花ひきだたがうらとんびくと出る
夜のあつくむいやうへは生あ
うら面をうらじの雲を命もや
雲世念ひもむがやうくと出る
あ川北いからいさうハあまうでもう
むまよの花え肉と出る名のと
徳うけぎ連くあやハ使とふ出る
あふうらまらふてうらそびやく
うらうらあつてうらあつて

西
二
三

まらうらうらあつてうらあつて
振袖と着るうらうらあつて
雨智屋六十四文うらうらのけ
うらけりふたいうらうらあつて
やけふとあつてあつてあつて
今全の目と枕のあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつて

まゆり〜雲子ととも〜
業々〜ん 西風と〜
一ノ木斗り付〜る
糺ッ〜り〜り〜みめ〜
ど〜り〜り〜る 是等が〜
死〜る 此大目が〜
卵〜と 娘も 夜お〜
き〜つと のらげ〜
祢志のた〜り〜人〜

十一
十一

雲の面が〜り〜が 膚まぶ〜
徳徳と〜ら〜ら〜ら 下女〜
時ハ〜ら〜ら〜ら ぬさの 肉
あ〜ら〜ら〜ら せん あひ〜
下女〜ら〜ら〜ら 後で〜
一〜ら〜ら〜ら 二人 横〜
川〜ら〜ら〜ら とも〜
大石の〜ら〜ら〜ら 一〜
さ〜ら〜ら〜ら あり〜

大目師からMuroへ 十位とる

あらんこゝろをいふ事かすか

大男かふんしんか

だんをだんか

建かーまよと

毛をきいふ冊の

川で

を

を

を

を

を

を

を

を

を

を

を

を

おろすおそり皇の青姫の出
むいなりと子の平ををそい令屏尻
爪のまいハ翠ハハハハハハ味せん
足おと出る助ハハハハハハ下
思ハハハハハハハハハハハハハハハハハ
驚ハハハハハハハハハハハハハハハハハ
式日の子紙日付ナ乃下ハ驚し
懐ハハハハハハハハハハハハハハハハハ
古妻ハハハハハハハハハハハハハハハハハ

むいきのこハハハハハハハハハハハハハ
まハハハハハハハハハハハハハハハハハ
多ハハハハハハハハハハハハハハハハハ
サハハハハハハハハハハハハハハハハハ
碑ハハハハハハハハハハハハハハハハハ
山の羊ハハハハハハハハハハハハハハハハ
草ハハハハハハハハハハハハハハハハハ
繁ハハハハハハハハハハハハハハハハハ
天ハハハハハハハハハハハハハハハハハ

ナニ日... 中... 終... 二十... 茶... 素... 丁... 小... 世... か... 後... 茶... 其... 玉... 一... 飛... 少...

五三三

抑揮ひふふにま夜名、
色子小如房やきうくもんと入し
つらむくもちかきものもをこ峰とあ
伊勢ぐ紫おきも俺で、
夕まお物、
あんへいさき、
子や足もあいられ、
あまふえ糸、
たぐさ、

五十二

まい、
ちと、
花角、
まの、
不鬼、
おま、
ふじん、
白、
通俗、

古よかありしやまゝ一心命なり
むらけのしるしに人よしの
おまゝがいやまゝのつれ入るも
千金のつらふ武部夜すゝなり
ふゆのふもふ西川のつらふ
抑々しむちちつらふ令集氏
番えしむれとやまゝ多分やうさ
英しむれとやまゝ志すゝ
清者もふなむれとやまゝ

新世

は又係り名のしむれ志す海
大相ふれ等しむれ
やんしむれとやまゝいひ
お子のまゝれとやまゝ
も係まゝしむれとやまゝ
しむれとやまゝしむれとやまゝ
も係しむれとやまゝしむれとやまゝ
おのまゝしむれとやまゝしむれとやまゝ
門まゝしむれとやまゝしむれとやまゝ

たしまいひあちりてくぬつこみ
ぬす指四五本ふりどらきーらひ
たごこつぐもいといやうしこま目
かちちらふおれがめりらしむぬち
上田の古器も大板ぶむしこ
十日さくけをひのやましんり
坂の面ハふくし十日
駟形としけく養海とくはこ
土器トト戸ちりしとく
下戸しぬ胃しちりし花のく
たけしこしちりしちりしかき
酒呑ハせんりしちりししる
つたけし葉のちりしちりしつた
ちりしちりしちりしちりし計
こま目しちりしちりしちりし
己の切乃ちりしちりし仲まがしり
さしちりしちりしちりしちりし
市はさしちりしちりしちりし

ひこつゝううの目ヤシふあきり
ちとけ下くふ色いせんうじ
まやうくの宮女携が志れつたい

押入五十三卷

市仲菴の旧友 笛老人の
撰帛をありえ家内喜多の笛れ
秀彩をかりやせんらんるの巻ふ
結く志らし川翁のまらん葉
高名の叢草よらん春陽よ
萌の如し 十世道くく

お先真平篆印免筆と
折々字々。研の美ぶかり成
ふ事一たり

子誠



蘇風柳文

蘇風柳文
柳文

源氏治范

源氏治范
治范

和漢軍機

和漢軍機
軍機

蘇詩

蘇詩
蘇詩

